

国語辞典において、わかりやすさとはなにか。

国語辞典において、わかりやすさとはなにか。

辞書の個性がうたわれているが、ユーザーはそれを理解せずに手に取ることが多い。収録語数の多いもの、説明が丁寧なもの、用例が豊富なもの、新語に強いもの、または保守的なものなど、さまざまある。しかしどれも「わかりやすさ」があったほうがいい。では、辞書において「わかりやすさ」とはなんだろうか。国語辞典を引き比べることで、これを考える足掛かりとしたい。

▼知っている言葉の意味や使い方を、より正確にわかりやすく教えてくれる。

### 【水】

<三省堂国語辞典 7>

- ①自然界に多くあり、われわれの生活にはなくてはならない、すき通ったつめたい液体。  
〔水素二、酸素一の割合の化合物〕  
「川の一・水道の一・一の事故 [=水難]」(↔湯)
- ②液状のもの。「ひざに一がたまる」
- ③新しい環境(カンキョウ)。「プロの一」
- ④〔すもうで〕←水入り。  
⇒お水

<新明解国語辞典 7>

- ⊖泉からわき川を流れ海にたたえられたり雨となって降って来たりする、冷たい液体。化学的には、水素と酸素の化合物としてとらえられる。〔化学式  $H_2O$ 〕〔きれいなものは無色透明で飲食に適し、生物の生存に不可欠。熱したものは「湯」、蒸発したものは「水蒸気」、凍ったものは「氷」と言う〕  
「寝耳に一 [=⇒寝耳] / 湧(ワキ) 一・飲み一・雨(アマ) 一・一争い ③ 一飢饉(キキン)」
- ⊖液状の物。水分。「膝(ヒザ)の関節に一がたまる / はな一・一あめ・一ようかん・一おしろい・一物・一ぼうそう」  
かぞえ方 ⊖は、一滴・一杯

▼ぼんやりとは知っているが、類語との弁別がわかりやすい

※「水素二、酸素一の割合で化合した無色無味の液体。地球の大部分を覆う。」と記述されていた時代から、三省堂国語が「われわれの生活にはなくてはならない、すき通ったつめたい液体。」と記述したことから、生活に密着した語積の在り方や、わかりやすさを指向する辞典が求められはじめた。

### 【丘】

<新明解国語辞典 7>

見る人に威圧感を与えることもなく、散歩がてらのぼることが出来る程度の高さの、ゆるやかに隆起した土地。「小高い一 / 愁ひつつ一にのぼれば花茨(イバラ)」⇒山  
表記 「岡」とも書く。

かぞえ方 一丘（イッキュウ）・一座

「山」と「丘」の違いを、「威圧感」「散歩がてら」におく。

※辞書をひく人は言葉の意味を知りたいというよりも、似た言葉とのちがいやニュアンス、あるいは用例などを知りたいのではないだろうか。

▼知らない言葉を、わかるように説明する

#### 【ガレット】

<三省堂国語辞典 7>

- ①フランスのブルターニュ地方で作る、そば粉のクレープ。
- ②フランスの焼き菓子（ガシ）。パイ生地（キジ）を使って、丸く平たい形に作る。ガレット デ ロワ。
- ③〔料〕丸く平たい形にした料理。「じゃがいものー」

※はじめて聞いた言葉を立項し、説明するのも辞書の役割。

▼なんという言葉かわからないものを調べる

#### 【りんご】

<明鏡国語辞典 2>

多く紅色・黄緑色の甘酸っぱい果実を食用とするバラ科の落葉高木。また、その果実。生食のほかジャム・ジュース・酢・酒などの原料にする。紅玉・陸奥（むつ）・ふじ・つがる・王林・ゴールデンデリシャス・スターキングデリシャスなど、栽培品種が多い。四、五月ごろ、枝頂に白または淡紅色の五弁花をつける。

※日本人で「りんご」をひく人はなにを求めているのか。意味ではなく用途や品種、あるいは作り方などと考えた結果のもの。

このように、他の辞書には見られない強みを持った各辞典を、「わかりやすさ」という軸をもとに比較検討し議論の材料とする。論点を明確にするのが本講演の目的である。